風采

乘風

月谷艷子

采風

采風

白谷艷子

采風

帝國圖書館藏

采風

白岩艶子

采風序

長江の壯觀、峽口の奇勝、金陵星沙の眺めをはじめ、洞庭のゆほびかなる、西湖のうるはしきなど、余かつて一度遊びて、忘るゝこと能はざるところなり。

白岩つや子ぬしは、備前閑谷黌の校長故薇山西先生の女にして、幼より家學を承け、

長じて子雲白岩君に嫁ぎ、よく家を修め、わが竹柏園の門たちならして、歌文の道をいそしまれぬ。

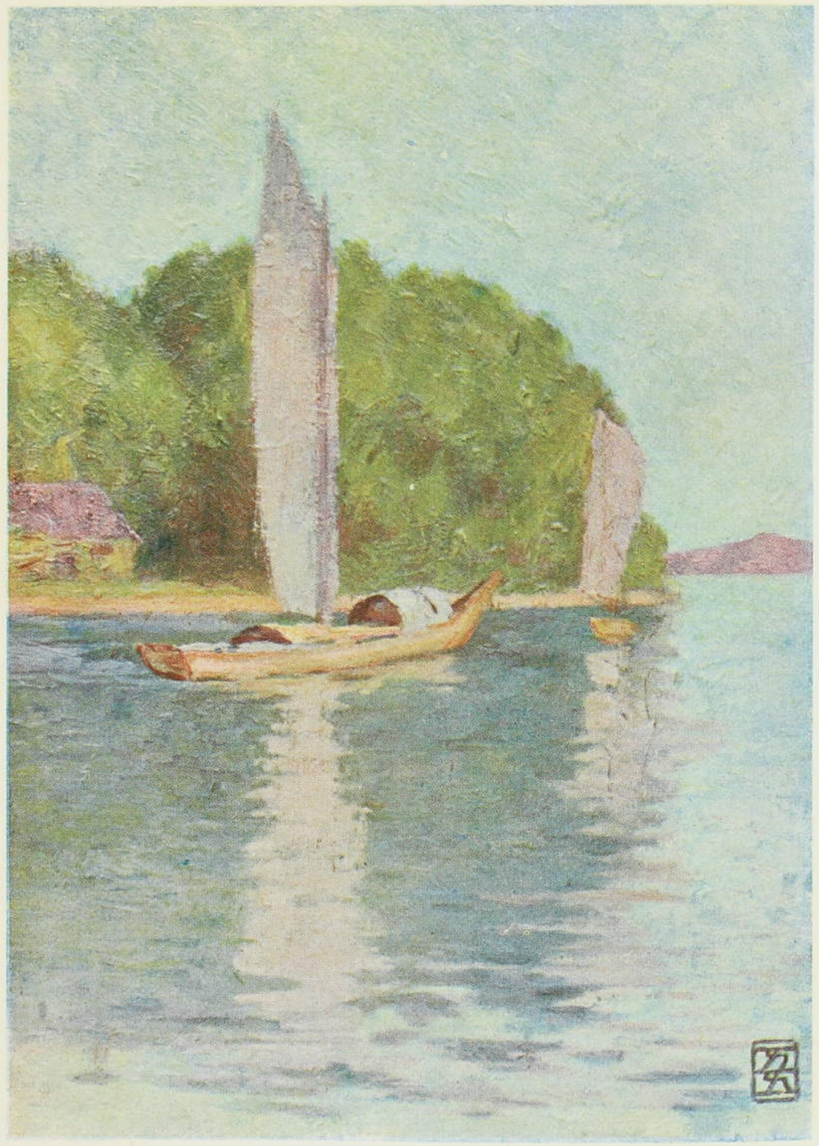
白岩君は、はやくより南清にものして、事業を、おこされし人なれば、わが國にあるよりは、彼の地にあること多かりき。ぬしまた、夫君に隨ひて、往復十數度に及び、ふかく南清の風物に親しみて、その歌に文に、或は風

俗を寫し、或は旅情を敍べ、或は山水を詠ぜるなど、いづれもかりそめの旅人の筆すさびに異なり。殊に婦人の作として、觀察の緻密なるものあるぞめでたき。されば、一卷にせられよと、すゝめしことゝ、ばく〳〵なりしを、こたびいよゝ思ひ立ちて、世に公けにせらるることとはなりぬ。ぬしの作、その數多く、固よりこの一卷に盡くべくもあらねば、

そは、第二集に於いて補ひてむ。

明治四十三年一月

佐々木信綱識



采風

白岩艶子

河くまに舟さしよせて夕けたく煙に暮る
る岸の竹村（蘇州より鎮江にものしける時九首）

鐘の音ゆふべの水をわたり來て蘆間の小
舟むしろ帆おろす

船窓にあさ日にほひて森の大木梢なかば
は薄紅葉せり

小舟朽ちてひしの花咲く枝河にあひる遊
べり日は斜なり

よつ手あみまもる翁のひげ白しむなしき
魚籃の滿たむ世やいつ

岸づたひ小舟の綱手ひく舟子に少女まじ
れり父や病みたる

沼に遊ぶ水牛のむれ野羊のむれのどかに
暮るる蘆の村里

小雨ふる秋の夕べを河波に胡弓あはする
舟の若人

ほしいままに秋風そ吹く水牛の遊べるほ
かは障りなき野邊

やすらへば法の師いでてわが爲に菊の茶
を煮る甘露寺の朝（甘露寺四首）

手折りつる桂花（かつら）の一枝（ひとえ）轎子にさして露わ
けのぼる山寺の道

焦山のいただき淡くもやに明けて江にそ
へる村に庭鳥の鳴く

驢にのりてはせ行く友のうしろかげ蘆の
穂末に見えがくれする

ただならぬ蘆のそよぎよさしよせて落人
まてる舟もあらぬ世に（烏江）

いにしへの跡とふ秋の夕雨やこころに誦
する古きからうた（潯陽江）

十二峰雲にかくれて江にそへるふもと廣
野に秋の雨ふる（廬山）

轎子にのりて今日はわが行く舟路より昨
日は見てし岸の蘆原

うちむれてゐのこ遊べる岡のうへに名も
知らぬ花の黄なるが匂ふ

星うつり世はかはれどもとこしへに流れ
はてなき長江の水

岸にそへる蘆間の小村くれそめて大江の
水に夕ばえうつる

蘆そよぐ大別山の秋風にさざなみ寄する
月の湖（漢口六首）

たけにあまる蘆間のこみち黄菊さきて秋
の日寒き大別の山

赤き青き旗さしものかげ見えて銅羅の
音おこる村はづれ哉

轎子にのりて行くや伯牙の琴臺に楊みだ
れ散る堤こみちを

露しげき一すぢ堤わが轎子と君が馬と行
く秋草の道

畫に似たる大江のほとりまぐさ刈る賤が
敏鎌に夕日きらめく

のろしあげて旗ふるさまやさながらに物
がたりめく兵船かな（洞庭湖四首）

夢の如き江上の月つきの中に今わが船は
入るかとぞ思ふ

人の世のちひさきおもひ耻ぢらひぬ空と
水との湖の上にして

かへるさのわれらが幸も白魚磯の昔がた
りに習へとぞ思ふ

風鐸のひびきは遠く空になりてあけの階
いまおりつくす（岳陽樓）

ある夜見し夢の薄雲たちまよひ月にもく
らきうき洲の里（蘆林潭）

ゐめぐと秋雨そそぐ四つ手あみ守る人
なき蘆のまろやに（湘陰）

おはしまさばまづ告ぐべきを此たびの嬉
しきにつけて父ぞ戀しき（長沙につきける日）

君と共に二度三度いくそ度見むとちかは
む月を大江に（湘江）

君とふむ紅葉ゐたみちいつか又かくて遊
ばむ岳麓の山（長沙九首）

おくれつる友まちあはす山かげのいづみ
にゐばしひたす秋草（白鶴泉）

籠にまじる野菊あはれと指させばかへり見て笑む草刈をとめ

おりてこし岳麓の峯雲にいりて夕もや深き江を漕ぎ歸る

跡とへば露にみだるる葛の葉のうらみがましき虫の聲かな（曾公廟二首）

落葉ふむ旅人のせて廻廊のかげさかしまに池にうつれる

この樓に書ひもとかむ夏もがなばせを葉に降る雨を聞きつつ（席公祠）

道を聽きて心をすます人もあらず落葉ぢぐるる禪窓のもと（開福寺）

先の轎子あとの驢の人呼びかはし狹霧を
分くる宵やみの道

藍關のむかしがたりも忍ばれて驢背の人
の面わさびしき（洋郷に行けるとき王生が三十里ばかり送り來ければ二首）

驢にのりて夕日かたぶく秋の野を別れて
かへる唐人あはれ

轎子にのれば轎子さしのそぎおり立てば
袖にまつはるうなゐ子の群（湘潭）

五百年王者あとたえていたづらに雲ゆき
きする紫金山の峰（南京八首）

夏草をふみわけて訪ふみささぎの道守り
をり石馬石人

みささぎに初音手向けてほととぎす姿は
霧の後湖のあなたに
うなゐらがのぼりて遊ぶ城壁のくづれに
咲ける虎の尾の花
たそがれを家路にいそぐ驢のむれの足音(あをと)
さびしも石だたみ道

老道士いにしへかたる聲さむし北極閣の
雨の夕べを
いにしへの榮華の夢のあとのせて畫舫く
ちたり秦淮の水
胡弓する音もさえゆく江の月に國を憂ふ
る人ありやなしや

花はちすかをる西湖の朝あけや御遊の舟
のいまもあれよと（西湖九首）

驢にのりておぼろ月夜をうたせばや楊か
すめる白堤の上

家鴨追ふ翁棹さすたらひ舟ひし咲く湖の
岸をつたひて

ありし世を汝に問はむ放たれし鶴舞ひく
だれ梅の林に（放鶴亭）

駒の足音遠くなりゆく斷橋のわかれかな
しき夕暮の雨

露に伏すかるかや小道たどり行けばぬれ
て聽ゆる靈隱の鐘

一すぢの清き流を中にして道ますぐにも
つづく竹村

いにしへは鳳輦こゝにやすらひて愛でま
しぬとふたぎつ瀬の音（壑雷亭）

秋ふかみ桑のひろ葉のいろづきて初霜す
らし靈隱のみち

銅羅の音爆竹の音河上に三つ四つつづく
丹ぬり引舟（蘇州六首）

遠き野に日はかたぶきて運河のかは波ゆ
るう櫓の音ひびく

かほよ人みづから汲みし眞清水のかれし
岩間に萩が花ちる（西施の汲めりといふ臙脂井にて）

ひしとる子歸りはてたるたそがれや小舟に蘆に秋雨そそぐ（采菱洲）

家三五桑わか葉せる畑中にむしろ帆かかる里の舟つき

かくて三人舟遊びすとふるさとの母に文かく燈火のもと（二人の弟と蘇州に遊びける時）

この秋は露ことにおけこの秋は月ことに照らせうた人來ます（師の君の來ましける秋三首）

折しもあれ唐あや紅葉あやにしき君がみうたの花にならなむ

雨もよし秋くれがたの長江の岸のけしきを見つつ行きませ

民船に湘雨をわびし去年までの憂かりし
旅路いまは夢にして（湘江丸開航しける時二首）

君を思ふわが此おもひ風となりて追風は
吹かむ洞庭の湖（うみ）に

吳淞（ウーソン）に水先小舟まつほどを志づかにかかる有明の月（上海雜詠三十五首）

みなぎれば禹跡九州うるほしてあまりあるらし楊子江の水

吳淞のあけぼの見むと駒なべて思ふどちゆく朝霧の原

龍華（ロンホワ）の花の便ありいたづきのとくいえまさな共にたづねむ（千賀子ぬしの許に）

龍華寺のかへさは桃の花車みやびの友に
春を告げばや（龍華寺六首）

けはひ濃きをみな子遊ぶ透垣のほとり眞
白く梨の花ちる

幼子に案内せさせて木蓮の一枝こひぬ畑
中の家

さきだちし驢馬の鈴が音遠くなりて桃さ
く里の日はたそがれぬ

官人の行列美々し春なかば紅ふかき桃の
林を

こまとめてゐばしやすらふ薄月夜すもも
花ちる畑の中みち

昭君のなげきに似たり鄙びたる茶館の窓
の海棠の花

わがせこがかへります日と花がめの花い
けかへて朝清めする

夕立の露まだ落つる楊柳の一むらかげに
馬いこはする

民船の燈籠ながし見がてらに人行くらし
も河沿の道

ふるさとの産土まつり今日なれば干さと
のをちに伏しをがむかな

ふるさとはほたる飛ぶ頃ふるさとは梅黄
ばむ頃こと國にして

もの思ひおもひつかれてねし夜半の夢路

につづく故郷の道

人ごとにかつらの花のかざしゐて行くや

愚園の月のまとゐに

星一つひくくかがやきて夕もやに月かげ

あはし張園の森

星暗きもりの下道わけゆけばかつらの花

か袖にかをるは

のりすてし民船ゆるるあげ潮や早瀬にか

はる運河の水

うれひありや金釵ゆらめくあて姿丹ぬり

の轎子に桂花かざして

運河に朽ちし小舟を家として泥にうもる
るかれも人の世

やきすてし紙錢のけぶりほそぼそと蟲な
きよわるおくつきのもと

わた畑ここにかしこに日まはりの花咲く
あたり小羊ねむる

賣蓬兒のふえの音さむき夕ぐれや秋雨そ
そぐ西門の外

緋桃さく小窓のもとの榻によりて履ぬふ
をとめ髪うつくしき

菊咲きてあるじが古稀のうたげすと綵門
つくる小春日の庭

みそささへささやかに飛ぶうら畑の桑の

朽葉における初霜

ゆふされば鵲とまる野の末の楠の大樹に

木枯すさぶ

天地にはぢぬ心の一つあればよしあらた

への袖せばくとも

紅の牡丹くづれて濃みどりのはえなき國

と女申しけり（西太后の崩御せられける時）

いとけなき君をろしめす老いし國くにの

かための人また逝きぬ（張中堂の薨去を聞きて）

都へと召す人もなき世の秋をむかしなが

らに荔枝みのれる（楊貴妃の昔がたりをおもひて）

ねがはくはみそらの星の國までもわが大君のおろしめさなむ（明治三十七八年戰役の頃）

東林禪寺

序幕　白髯長きは父、若き黑衣の人は此館の主人、公けの任務を帶びて、暫し旅立つよし談る。父諾して奥に入る。やがて容顏花の如き夫人、兒をつれて入り來る。主人机上の笞を取りて兒をうつ。夫人は悲しげに、あゝ又義弟が此兒の上を惡さまに、夫君に告げしよと、泣く子を袖もておほひ、おゝよき子、過は再せじ、父上許し給へ、おゝよき子と、慈母の情。兒は甘えてひた泣きに泣く。我家に在らぬ程、敎へおろそかに爲なと夫

人を誡む。母子奥に入る。叔父（繼母の弟）は白痴の甥（主人の弟）にて繼母の生めるくこそ。と同じく入り來る。主人迎へて、叔父上か、能白痴おろかしきさまして、と見かう見しつゝあり。否、能くも來らずと、いつもの金の無心いふ。

二幕　繼母の室の場　繼母は、無賴の弟と相向ひて談る。白痴なる童は、母の肩により、叔父の膝にまつはる。白痴ながら、兄に代りて此家の主人たらむと聞きて喜ぶ。叔父、甥をともなひて室を出づ。入りかはりて、旅より歸りし主人、繼母を拜して、まづ捧ぐる家づと。繼母は鬼の目を細くして、急ぎ立ち迎へ、衣の塵を拂ひ

遣りなどす。勞れをねぎらふ言葉もやさしく、下にも置かぬいつくしみ、曇りなき心には、繼しき母の僞りのなさけも、身に染みて有難く、謀らるゝとは夢にも知らず。母はさもいひ出でがたきさまして、漸う口を開き、あはれ孝行なる御身に引かへて、うたてや留守を預る妻の身にあるまじき行ひ、さは云ふものゝ、嫁が身のをさまらぬも、この母が至らぬ故、いかで許してよ、と空涙して貞女を陷る。母上、そは眞か、と正直一途の主人、赫と怒りて、憎き女と走り出づるを、去すましたりとほくそゑむ傍に、例の白痴、ハ、、、と高笑ひ、あわてゝ口を

おさふ。

三幕　夫人の室の場　椅子よき程に、又机には蘭の鉢あり。入り來る夫を喜び迎へて、恙なき御顔を見參らする嬉しさよと、憂ひの眉開きて、あてやかに花の面愈美し。主人は怒りの聲荒らかに、さがれとにらむ。夫人驚きて、こは何のお怒り、何事の御心にかなはでかと、いはせもあへず、隠し持てる刄ふりかざし、不貞の女と打ちおろす。夫人聲をえぼりて、こは我夫、ものに狂はせ給ひしか。汝こそ狂ひたれ、と猶たける夫のかひなにすがりて、漸う刄を取り隠し、涙はら〳〵と、わが夫、

誰のかげ言きこしめして、かゝる濡衣をと、かき口説けど、先入主となりし主人の心、和らぐ可くもあらず、つと足蹴にして、胸に問へ、今よりは妻とも云はじ、夫とも思ふな、縁は斷ちつるぞとばかり、袂を拂ひて出で去る。あとに夫人はよゝと泣き入る。あゝ惡者ども、夫の心さへ取り果てしか、頼むは父上、それも我が濡衣ほさぬ間は、母のいつはり眞と通りて、我が眞心の諌も甲斐なからむ、あゝ何とせむ、何とせむ、われは夫に去られぬ、行くに處なき女の身、廣き世にうき身一つを置く方なしと歎きに去づむ。やがて心を取り直し、はふり落つる

涙を硯にすり流して、今はと捨つる世に形見の玉章、父に宛てたる一通、泣く〳〵認めて、無心に遊べる吾子を呼び、これ吾子よ、祖父上にお使してたもれ、これは大切なるお庫の鍵、母のこの手紙と、落さぬやうに。ハイとおとなしく走り出づるを、暫しと呼びとめ、つく〴〵と見まもる幼な顔。あゝ今宵よりは母無き子と、思はず落とす涙。母様なにを泣き給ふと寄り添ひて、いぶかしがるに、はッと心付き、否々とまぎらはす。廻廊傳ひに行く子の姿、延び上り延び上り見送る。

四幕　宵暗にまぎれ出でて、常は乘物にて往來する

道を、徒歩にて急ぐ生家の門、おとなふ聲もつゝましし。供もなくて何事の御いらせぞ姉上、と迎ふる弟の顔、涙のひまより見あげて、ありし次第を談り、されば姉が一生の願、かの高德の尼君います山寺に伴なひてよ。早まり給ふな、と諫むる弟の言葉も今は恨めしく、さらば姉が言聞て給はらぬか、迷ひ出し身なり、一人にて分け入らむと、立ち上るを、さほどに御心決し給ひしならばせんすべなし、御供申さむと、はらから打連れ立ち出づ。

五幕　後妻の詞ながら、眞とはおぼえず、彼の貞淑の嫁女がよもやと思案にくれたる父、繼母猶讒訴の言葉

をたゝず。折から白痴の童走り來りて、姉の家出を告ぐ。主人を呼びて實否を糺さむと、人を呼ぶ折しも、入り來るは可愛き孫なり。父のほとりによせじと、白痴は、にらまへをり。幼子は、恐づ〳〵祖父に近づきつ、賢こくも母にいひつけられたる如く、鍵と手紙とを渡す。薄墨のあともあはれや、亡き子より父上に、これはと驚き封おし切り、讀みくだすまゝに、色かはり手はをのゝく。繼母は折惡るしと眉をひそめて、白痴の子を招きて室を出で去る。こなたは祖父、老の涙にかきくれつつ孫の手を取りて泣く。父の召しに、とつかは入り來

し主人を見るより、嫁女の手紙を差しつけて苦しき聲、わが子ながらこの獃子(タイツー)、あたら貞女を。父上、貞女とは誰のことを、いまだ御聞には達せざりし、不貞の妻が家出、と言葉をかへしつゝ、思はず文に目を遣る。こは、さてはと驚く子、父は聲をはげまして、早く早く跡を追へとせきたてつゝ、おのれも孫の手を取りて續く。主人は足早ければ、早くも山の麓、一すぢ道にはたと逢ふ妻の弟。おゝ義弟か。姉上は。おゝ兄上と、力なき聲なり。主人形見の文と思ひ合せて、心も消ゆる樣に夢心地にて足を空に、山の方へ。

六幕　正面に觀音の御像、香の煙たち舞ひて、尊き本堂の場　お蠟上ぐる尼一人二人、外は木枯の音、墨染の衣わびしき山寺に、あだかも花一輪、枝をはなれし寒椿の趣あり。尼は樂しきものにはあらず、女の道に違ふとも世は捨てぬもの、姑の惡だくみ、叔父の謀計、などあばき給はぬと、あたら散らさむ花の姿を惜しみて、老尼ねもごろに諫むれど、耳にも入らず。憂き身を救はせ給へとて聞かねば、力及ばず、今はと飾をおろす。女は命の黑髪、さりとては憂きに捨てつるわが世の形見と、丈なすを手にわッとなき倒れ、氣を失ふ。鐘の音、讀經

の聲、線香の煙、濛々とたち舞ふ。あてやかなりし刺繡の袖、墨染に變りて、うら若き尼、われとわが身をかへりみて心弱く、かくては夫にも子にも逢へぬにやと、立關（入定の室）に泣く〳〵入れば、老尼、錠をはたと閉ざす。折しも狂氣の如く入り來る主人、弟子の尼さゝへ兼て、老尼を呼ぶ。老尼珠數つまぐりつゝ出でて、いづ方よりと問へば、我が妻、我が妻に逢はさせ給へと、奥をさして入らむとす。妻の君とよ、おゝ妻の君、遲かりき、今しもかざりおろして、佛の道に、されば こゝには、御身の妻といふ人あらず。主人失心して倒る。尼達あつまり、

呼び生けて、懇に山を下れと勸む。唯一目、一目あひたしと男泣に泣く。老尼あはれがりて、道ならねども、さらば一度許し申すべしと、立關のほとりに伴なふ。小窓より變れる姿を一目。こは我が妻か、花の姿の我が妻かと、涙の聲はまさしく夫と、さすがに道心ゆらめきて、胸かき亂さるゝ愛のきづな、我れにもあらず小窓よりさしのぞく。やつれし面影、墨染の衣に恨みは盡きぬ歎き。痛はしや我が妻、罪は皆この身、許してとさしよりて手を取らむとす。老尼おごそかに推し隔てゝ、今は佛の御弟子、破戒あるべからず。男聞かず、かけよらむとするを、數多の尼、力を合せて戸の外に推し出だす。

老の身は足もと危ふく、おくれて着きし祖父と孫、嫁女に逢はして、母樣にと音なふ聲、尼達目を見合せて當惑す。吾子か。母樣と、立關の小窓にさしのぞきかけよる恩愛の涙、おゝ嫁女、なさけない其姿と、わッとばかり聲をはなちて泣く。此孫が迎へに來た、歸つてくれと手を合する老人。子は、母樣歸らう、母樣歸らうよう。父上にも相濟みませぬ、さり乍らいとし子に別れて、かかる姿となりはてしも家の爲、今は出家の身にしあれ

ば、ゆかりもなし、悪者どものたくらみ殘らず申さむと、こゝにて繼母の企を談る。父初めて聞きし家の大事に驚ろく。さらば父上、吾子を、吾子を賴み參らす、吾子よ、祖父上と共に歸りて、末々迄すこやかに榮えよや、母は、と跡は涙。いやだよう、母樣一所に歸らう、家に歸つて一人で居れば、伯父樣に又うたれる、いやだ、いやだとむづかりて、地だんだ踏む。尼達たまらず、一同よゝと泣く。さらばどうしても歸つては呉れぬか、老の身を生き長らへて何かせんと、あはや立關の柱の石に額うちあてゝ死なんとするを、尼達いだきとゞむ。主人氣

ぬけして眞の馬鹿になり、いづこよりか又迷ひ來て、小窓をのぞく。尼達驚ろき騷ぐ。

七幕　萬目白皚々、いつしか更けて雪となり、山寺を遠く見せたる場　悪者の叔父、白痴の甥をそゝのかして大鉈ひッさげ、物かげより待つとも知らぬ老人、孫の手を引きて、きゝわけなく母樣々々ようと泣くをすかしつゝ、とぼ〳〵と山寺より歸り來る。折から異形の者數多從がへて、神しづ〳〵と林間におりたつ。老人と幼子とは、悪者の叔父に追はれて、逃げまどふ。悪者は大鉈ふりかざしてあはや二人を眞二つと見る刹那、

鬼神槍にて惡者のかひなをはたと打つ。主人も亦追はれて來る。とゞ引き組み倒れたる處に、神の使の猛獸いでて、惡者を食ひ殺す。繼母髮は亂れ口はさけて、さながら鬼女の相、走り來りて白痴の子と力を合せ、祖父と孫をねらふ。二人にげまどひて相抱きたるまゝ、心身つかれて、はたと倒るゝを見すまし、飛びかゝりて打たんとする間一髮。世はとこやみとなりて、雷鳴轟き電光一閃、悲鳴と共に惡人ほろびて幕。

紅桃

春は龍華寺の桃見、老いたるも若きも、此時をはづしては、日本人の面伏せと、浮き立ちつ。茶店、煮賣屋さへ畑中に出で來て、里の賑はひ、云はん方なし。舟より行く團體の幾組、陸には家族づれの馬車、引きも切らず。椅子を持たせ、毛布を載せて、あるは丘の上、あるは花の木蔭に、樂しき席ぞ設けらるゝ。瓢ならぬ瓶(びん)づめの酒に用意のわりご、珍らしがりてより來る支那人にも、おすしの一折は取らすべし。男子たちは、醉ひてうたひ、女

たちは今日を晴れの衣の裳裾かへして、花蔭に鬼ごとなどす。歸るさの一枝、楊を添へたるはやさしく、木蓮は夕暮の色にもさやかなり。云ひ合せたるやうに、誰の肩にも桃花にほひて、花見車の音、大馬路につづく。船なるは、夕霞花も緑も一つにこむる百歩橋のあたり、今し岸を離れてかへりみすらむか。あゝ一年に樂しきはこの春の一日ぞ。

夏の日

人々のよそほひ眞白にかはりて、電氣扇に漸ういきをつく。外の暑さ入れじと、室のよろひ戸かたくたつるやうになりては、そぞろに日の本の戀しさ。避暑に歸る人、昨日も今日も船に滿ちて、ねたや二日の後には、山紫水明のふるさと、海邊もよし、山里もよし、藍染めの浴衣すはだに着て、月に立つ影、思ひやるだに涼し。浴衣に足袋はいたるを、こゝにてはのがれぬ風俗と聞くもわびしや。晝の暑さ、夜までさめず、霧を厭へば戸も開

けられず、夏こそ苦しけれ。

天長節

日本晴のうららかさ、十時になれば、人々フロックコートに絹帽、心も身もすがすがしく、領事館に集ひて、うやうやしき遙拜の式、君が代の聲ものどかなり。シャンペンの祝杯に、いつしか櫻色になれる、今日を榮(はえ)ある菊の花と、いづれ劣らぬめでたさ。こゝかしこの日の御

旗、朝風にひるがへるを、道すがら見るに、あゝ日本人の多きことゝ喜ばし。園遊會のにぎはひ、夜會の美しさ白襟紋付の夫人たちの晴姿、外國に住みては、此日の殊にありがたくて。

冬の夜

めづらしう雪空となりにしかな、明日は銀の世界となりて、常は黄金にはたらく人も、暫し風雅の詠めやすべ

き、あれよ、すさまじき風の音と、今しもともしたる瓦斯の燈火のまたゝくをあふぎつ。炭さし添ふるストウブのもと、心やすき一人二人の友來合せて、物語は盡きせぬ都のこと故郷のこと。今度の便船には、いつよりも文の多かりし、中にも嬉しきは、誰々、御よすが定まりて、いづこに何日は御披露の宴あるよし。そよ、某の君も新夫人と共に次の船にて來ますべし。嬉しきこと、をかしきこと、談るに更けて時たちぬ。もう歸りましようと立ちかゝる人を暫し留めて、ボーイお供の用意は宜しきや、眠りてか、起し置けよと。さて友を送りて

出づる門のほとり、早けはひばかり白う見ゆるに、明日は郊外の寫眞とりにとほゝ笑まるゝ女の君、雪の朝あけは美しきもの、吳淞へ遠乘りの樂しみ、さらばといふ間もあらせず、靜なる大路に轆轤たるわだちの音。

羽子

天を轟かす除夜の爆竹の音しづまりて、元旦のしづけさ。初日ををろがむといふ人もあらず、見渡すかぎり

街の家つづき、一軒も殘らず戸ざしはてゝ、赤き紙に墨の香もこゝろことに、紫氣東來、國恩家慶など、めでたき限りの詞を書きつけて戸に張りたり。さすがに日高うなりては、年ほぎの人往來こゝかしこに、車よ轎子よと美しうよそほひ乘りて出で入る。内には鳴物入りの酒宴さゝめきあへる、賑はし。幼子達は門に出でて羽子つき遊ぶ。大方は男兒なり。えび茶、あるは紫の上着に、水色の下着して、黑き帽子の頂きについたる赤き打紐の結びも新しう、繻子の履はいたる、あどけなく愛らしきが、落ちくる羽子めがけて足を上ぐる、巧みなるは、二十三十はづさず。ひら〳〵と舞ひ上り、舞ひ落つるを右に左に受けてつく。氣上りてさと紅したる頰のあたり、眉のかゝりも、女のやうなる美少年この國にはいと多し。恰も蹴鞠する形ち、樣かはりてをかし。腰ゆひたるひわ色の帶のふさ、折々なびき見ゆるも美しう、のどかなる初春のながめや。

中秋

過ぎし野分に鳴く蟲の音もすみて、ものゝあはれはまさる中秋の月、詩人ならぬ人も李白が風雅を談りて、江上に舟を浮べ、終夜めで明かす。市中には、赤き青き絹布の藥玉、月餅の招牌をかざりて賑はし。雲なかゝりそと、誰も誰もさやかなる光を待つ。

書齋

雲形磨き出せる大理石の卓子に紫檀の椅子、窓のもとに置かれたる蘭の花かをれる室の清らかさ。折にあひたる聯の句どもいとをかしう、机上には何の書にか、帙に入りたるが、繪卷物と共に並びたり。あるじ待ち顔に銀の水烟袋一つ、五色のふさの風にゆらめいたる。

森かげ

今の江氏は建霞氏の息なり。日の本に留學五年、初めの二年は、閑谷なる我が亡き父の許に在しき。さて大

阪にて工業を修められつ。幼き時より相知れば、今も弟のやうに隔てなし。人柄もなみ〳〵のから人のやうならで、正しき家の子なれば、さすがにおほどかなり。今度工場開かれぬるよし聞しかば、見に行く。未だ程なくて萬とゝのはぬ勝ちなれど、若きあるじの、常は上着ぬき捨て、職工と共に働き居ますよし、ひたすら業をいそしみて、過ぎし頃開かれし氏が故郷なる蘇州の博覽會にも、自製紅白の蠟を出品し、銀牌得ましぬとぞ。龍華寺への道、半より左に曲りて、徐家滙の天文臺に今すこしといふ處、河添の森の木蔭に、利用公司の招牌を

見るべし。ゆるぎなう基さだまる迄にはなほ數多の苦しみあらむ、若き人のよくたゆまで、成功し給ふやいかに。此人も早く父君に別れて、世の困難にあひ居ますいたはしさよ。我が弟達も今はた同じ運命、學窓のもとに書を友なる二十ばかりの齡を、早くも世の荒浪に便りなき小舟と漕ぎ出でいそしめるよ、あゝ父無き人ばかりあはれなるはあらじ。河に沿へる森の木蔭しづかなるを庭に見て、門の方は廣々と畑つゞき野つづきなり。樓上の技師室に案内せらるゝまゝに去たがひ行けば、森にむかへる窓開きて、閑谷のやうならず

や、この靜けさと、打笑まる。かの塾舍の窓、實にかゝる靜けさぞかし、父なき後とて、父の如慕はれし師のなさけ、今も忘れず、朝夕の眺めを、學びつる閑谷にたぐへいまさか、實にかくて談らへば、父の許に在る心地ぞする。初めて閑谷に行きし時、星かげ暗き山路、たぎつ瀨の音を何ならむと、いぶかしみつゝ山莊に師と初めての對面、あゝ昔談りとなりぬるかなと談らるゝを聞けば、故郷人に逢ふなつかしさにかはらず。嬉しかりし今日の一日、こまかに弟へいひやらばや、あはれ同じくは此人の父君にも、我が父君にもきこえあげまほしきを。

茶館

お茶飲むとて、朝より夕べまで人入り集ふ、薄暗き家のうち、煤けたる卓子かこみて、缺けたる茶碗そゝぎもあへずすゝむる。夏は肌ぬぎたる男子の給仕したる、かかる處は客も大かた苦力（クーリー）なり。欄干めぐらしたる高樓に、彫刻したる廂きら〳〵しき招牌かけて、夜はあかあかと燈籠の火ともしつらねたるもあり。かゝる處

にては、杏の種子、落花生の砂糖漬など添へて出す。臺つきたる茶碗に、茶の葉入れて、客の前にて湯をさしてすゝむ。大方は急子用ゐぬ習慣なり。茶碗の蓋かたむけつゝ飲むを面白がりて、初めての人は誰も試みるめり。

愚園といふに、藤の花の盛の頃行きしことあり。池の汀に咲きたる薄紫の美しきを見つゝ、端近き石の卓を圍み、例の杏の種子などにて茶をすゝりつゝ、庭の太湖石の態とらしぶを眺め居れば、熱き湯に香水したゝらして絞りたる手巾、幾度も幾度も持て來。池をめぐれ

る廻廊のかなたこなた、阿片飲む室もあり、演戯する舞臺もあり。刺繍の小履に頰染めたる歌妓の客と共に遊べる、裏庭の玉ころがしには若き人ぞつどひたる。

日向葵

綿の花咲ける畑つゞき、秋風渡る野末など、處々に日向葵の花咲きたり。名のやうには榮なき色香を、詠めむ爲ならば、猶外によきがあるべし、いかにと此國の人に

問へば、西瓜の種子は價たふとくて、賤が夕けの膳には
のぼらず、この花、見む爲にはあらで、種子を取るなりと
答へぬ。道の邊に捨てし柩のめぐりに咲きたる、亡き
人の罪のゆるしを天つ日に乞ふらむさまなり。破れ
たる葉ばさ〳〵と音して、うなだれたる花の憂ひ顔な
るよ。遠くより見れば、人など幷び居たる樣にて、秋風
にゆら〳〵と大きなる花のゆるゝ物さびしさ。花に
疎ましきは無けれど、この花のみはと云へば、心なき言
いひ給ふな、稻に美き花は見ぬをと、かたはらの人は談
りき。

橋上

往來絶えせぬ橋の上、用なき折々打眺むる、いとをかし。
馬車自動車にて、ふみとゞろかし渡るは、よききはの人
なるべし。辻車のがた〳〵と、車夫の弱りたる、徒歩な
る人のゆるやかなるを、あとより自轉車にて追ひ越し
行く、したり顏なりや。忙しき世を窓の內より眺めて、
ゆくら〳〵かゝれ行く轎子の人、小車にこぼるゝ樣に
乘りて、車のきしりをかしく押され行く人、人樣々を朝
より夕べ迄おどろ〳〵の響の外は、もだして渡す橋こ

そ興深けれ。夜はまして、そゞろ歩きの人も加はりて賑はしきぞかし。更けてはさすがに人絶えて、月影靜に照らしたる程、馬の蹄の音高うゆく、大かたは印度巡査なり。黑き面に赤き布、頭にうづ高う卷きて、虎髯いかめしき大男の、手槍かいこみ馬上ゆたかにうたしたる、畫など見る心地ぞする。

いつなりけむ、蘇州に行きし時、夜泊ならで、朝とく舟の着きしかば、陸に上がらむには少し暗ければ、窓開きて見渡すに、近う石橋あり。この國ぶりなれば、形いと珍らし。朝霜白う置きたるを、幼なき物賣の、呼び聲あはれに只一人渡り行きし。誰が家の兒と云ひけむ物がたりも思ひあはせられて、今も忘れがたし。名に聞えたる寶帶橋よりも、この方こそ心に染みしか。

杏花樓と天仙茶園

夕つかた、良人と共に、四馬路（スマロ）の杏花樓（アンホウ）に、師の君を案内しまつる。參りあはせし同文書院の藤島君、支那人余聯珊といへる、ともなひたり。

暗く騒がしき家の中、隣れる室には、廣東人のうたげ酣なるに、入り來る客人ある折々、銅鑼うちならす音、耳もしひんばかり、かゝる所へわれもはじめてなれば、驚きて耳をおほふ。呼びにやりつる歌妓こちたきよそほひして來たり。胡弓にあはせて、一曲うたひ終れば、禮申して歸る。今度は未だ幼き十五ばかりなるが來れり。前のにくらぶれば、清楚のつくりなり。生れを問へば、蘇州と答ふ。昔より美人に名高き處がら、げに花のやうなる姿、うたふ調も妙なり、千里の外の客人の心地もせず、此よし傳へてよ、と師の君のたまふ。いかで

かは、みめも調べも劣りがちにて、と恥らひたるさま、めでたし。曲終へて歸る。やがて又入り來たるは、都のうまれ、ながれ〳〵てこゝにはあれど、曲は北京の調なり。歌の心は知るによしなけれど、三人のうちの上手なるべし。にこやかに笑みかたまけて談らふさま、物なれたり。時もうつりぬ、いざ芝居に御供し侍らむと出でたつ。向ひの室に人の立ちこみたる、何ならむときけば、新婚披露の宴といふ。そはめでたきかな、いづれか花婿の君ならむと見る。赤き衣着たるが其れなめりといふに、見れば年まだ十五にも滿ちたらぬが、出

入多き客人に、手をさしあげて揖禮する樣、いとねもごろなり。まことの芝居なるよと師の君ほゝ笑ませ給ふ。賑はしき四馬路を見つゝ、天仙茶園にいたる。道のほど、行きちがふ轎子の内、綾羅のよそほひ夜目にうるはしく、中にも幼きを肩車に乘せ行くは、さながら樵夫の花をかざしたるやうなり。高雅なる風こそあらね、世の中の春をあつめて花に酒に醉ふこの夢の間にこそ、城はかたぶき社稷は覆がへるなりけれ。

名たゝる優の舞臺に出づる今宵とて、棧敷は透き間もなく人いり滿ちたり。十中の八九は男子、日本の劇場

とはうらうへなり。聯珊ぬしの心盡しにて、いとよき所に我等の席は設けられぬ。例の耳おほはるゝ囃子ゑばし鳴りやまず。と見るまゝに、舞臺に現はれたるは、いかめしき官人、馬にのりたる心ばへなるべし、鞭をあげてさし招く。ほどなく從者と見ゆる三人いで來れり。折から、かたち見すぼらしきものごひの、よろめき〳〵其所を過ぐるを、官人いきまきて、從者に命じ、されよといふ。猶きかであるに、鞭をあげて打ちすゑざま、從者どもつゞけとばかり、かなたの幕に入る折こそあれ、花と見ゆる手弱女、足いとも小さきが、ゆう〳〵

と立ちいで、伏したる乞丐を慰め、且つ物取らせん、内にいれよなど云ひおきて入る。こたびはきたなき翁立ち出でて、いかに乞丐、などわれ家に入りたる、とく〳〵行けかし、と促がすに、否、こゝの姑娘（クウニヤン）のいりてやすらへとのたまひしまゝに。いかでさることあるべき、わが愛娘の身の上を知らずやと、怒りに任せて持ちたる長き煙管ふりかざし撲たんとす。待たせ給へ、若し我詞まことならば何とかしたまふ。まことゝや、よし、まことならば、われ汝を拜せん。いとよし、いざ、と誘らしげなり。汝は心狂へるならむ、我愛娘は、世を全盛のうたひ

女、大官の御方すら心を碎きて一笑を買はむと、百の寶なげうち給ふものを、かゝる汚らはしき乞丐に、目をだにかくべきかは、いで〳〵我愛娘こゝに招きて、乞丐が驚くさまを見んと立ちあがるほど、先の手弱女、飯をもりたる器、美しき手にさゝげて出で來りぬ。わが父何をかいきまき給ふ、ものうしとて歸しつるかの貴人が、怒りをうつす非道の鞭に伏しなやみたる、あまりにあはれなれば、入りて休らへとこそいひ侍りしか、もの欲しげなり、いざ參らせんとさしいだしざま、乞丐の顏つく〳〵とまもりて、うら恥かしげに思ひしづめるさま、

かの梨花一枝雨をおびたらむやうなり。父の翁は、こ
との意外に驚きあきれて、娘の顔まじろきもせで守り
をり。乞丐は、いかに主人の君、なほ僞りとおぼすや、と
く來りて我前に拜し給へ、と身を起す。父の翁は怒り
の聲高く、あはや煙管も折れよとばかり打ちすゑんと
する間もとし、手弱女は父のかひなにすがりて、我父、さ
な怒り給ひそ、われ此人の相を見參らするに、かく路頭
に迷ふべき人ならず、必ず高官にのぼり、世の中の榮華
を身に集むる人となりまさむ、賤の女が一飯のなさけ、
心よくうけ給ひしこそ嬉しけれ、禮なき業なし給ひそ

と、乞丐の方をぬすみ見て顔赤らめ、父の手をくゞりて
内に入りぬ。
幕かはりて、先きの乞丐と父の翁と、二人卓を圍みをり。
愛娘が言葉の奇しければ、種々のこと問ひ試るに、答は
水の流るゝ如し。聞けば、秀才の學位もありとか。か
なし子が願のまゝに、遂にいれて婿とせん約は成りぬ。
手弱女呼び近づけて、形ばかりの式、つゞれの袖にふさ
はしからぬ花婿にさしむかひ、これは又花はづかしき
花嫁君、願はゞ玉の輿にも容易く乘り得べき身を我か
らと、我子の美くしさ、おもひの種となりて、さめざめと

泣く老の涙、嬉しき悲しき幕は終へぬ。

花婿の乞丐、後に進士の試みに北京へと上りしよりは、旭の昇るが如く、高官の人となりしを、我妻の賤しき生れを疎みて、其昔惠まれし一飯の德と共に忘れ果て、高嶺の花に心をうつして、あはれ糟糠の妻を及に伏さしむるくだりありとか。人情の輕薄、美人の薄命、昔も今も將た唐もやまとも變らぬよと、師の君良人と共に、うちひそみ給ふ。かの手弱女に扮したるこそ、上海一と稱へらるゝ、名優周凰林なりけれ。

例の囃子騷がしう舞臺に出で來たるは、武裝いかめしき大將なり。年を經し戰に、兵は疲れ糧は乏し、あはれこの城支ふる今日あすの謀、おもひ煩らひて、悲憤の涙にくれたる程なり。をりしも出で來し從者の一人、御前に伏して、いかに我君、戰に疲れ、食ふに物なき兵は、かなしき妻子を血涙の及に刺しぬ、今は此城中、大奥の御方ましますのみ、殘りの兵ども、唯餓を待つより外は侍らず、今日よりは御前に供する一品もなし、何處の城も皆落ちぬ、降らんは千歳のうらみ、あはれ我君、今一戰其れまでをいかにせむ、此城中女といへば大奥の御方ましますのみといふ。大將は思に沈みつゝ内に入りぬ。

涙にやつれし面影も一筋亂れぬ黑髪たゞしく、君が幸なき武運、兵士等が苦、思ひ餘りて身を淸め、香を焚き、夜深く庭におり立ちて、天神地祇に祈りを凝らしおはす。これぞ大奥の御方と知られぬる。と見る、先きの大將窺ひよりて、うしろより及もてさゝむとす。最愛の妻、まして我を思ひ我が兵をあはれびて、斯くも祈れる殊勝のさま、よしや鬼となるともうたるべきや。心は消え、腕はなえ、及も地に落ちんとす。かくては果てじと幾度か勇を出したれど、いかゞはせむ、既に氣は挫けたり、胸をさすり息を潛めて、物かげに立ち隱れぬ。祈りを終へて徐々と歸る美しき妻の姿見送りて、又思ひいれるあたり、眞に逼りたり。きゝしにまさる支那劇よと、師の君のたまふ。更けたれば見さして歸る。彼の騷がしき囃子なからましかばなど語らひつゝ、賑はひまさる四馬路、水に陸にともし火花やかなる河街を、夜風に吹かれつゝ馬車を驅りぬ。

目もはるに綠を敷ける芝生、めぐりの垣根にいつも咲き匂ふ花の色々、近きは薫りを送り、遠きは虹の如し。門のほとり、あづさやや、小高くつくりたり。相向ひて平なる處に、めぐれる柱に針金渡して、自ら薔薇の屋根苔きたるがあり。邊りを皆紅白の同じ花にしたる、めでたし。色白く瞳青き稚兒の、裾短かなるが遊び居たる、つきづきし。池に添へる太湖石の洞中に、腰掛二つばかりすゑたる、こゝにはやすらふ人稀なり。池に渡せる橋の上の眺めこそ、いひ知らずをかしけれ。芙蓉ちりて秋はさびしき空の色、臙脂に夕ばえて、灌木の葉がくれに、塔の形したる支那家のかなたに沈む夕陽、池の汀の一むら薄、穂に出でたると共に、水にうつれるめでたさ。菖蒲さく初夏の頃、こゝに立ちて、雨雲のゆきゝを眺めつゝ、杜鵑待ちし景色を、をかしと人に談りしかど、秋の半、この夕ばえには、をかざりけり。

長三（チヤンサン）

いろまちの四馬路（スマロ）、不夜城の賑ひを、女の見たる通りす

がりの一目、男の君に談らむか。大通りの大馬路を南に、二馬路三馬路を車にてつと過りて、さて四馬路の夜にいりませ。ぞめきの群道をふたぎて、百の燈火晝よりも明らかなり。三層四層の高樓の上、こゝにもかしこにもおこる糸の音のゆかしさ。甲高なるうた聲、外まで洩れて心ぞときめく。と見る、花を簪したる人、右に左に走せちがふ。誰が招宴に侍るやらむ、これや聞ゆる長三か。燃ゆるが如き紅の頰、珠釵金釧綾羅のよそほひ、目もくらむばかり、腕輪重げの細きかひなを男の頭にかけて、ふはりと肩車に乘りたるやさしき姿、どよめく群集道をゆづりて見送る。

生れは蘇州と知れるのみ、九つの年養ひ親に賣られて、憂き河竹の流れ流れて春申江に、こゝはきこえし港として、呉越の客は昔のこと、名も知らぬ外國の旅人が慰めにも聘せられ、胡弓にあはせてうたふ節あはれといふは稀にして、花ならば手折て見たきが人情とやらむ。戀せし人ありとのたまふか、よしありとて儘ならぬ身の、うたてやなつかしき人には思はれず、思はぬ人に愛でらるゝが習ひ、かゝるはかなき身のたぐひ、やまとにも侍るにや、日の本はよき處ときく、供なはせ給へよや

と、先の面白きうたのぬしとも見えず、紅蠟の火影に物思へるさま、あはれにらうたし。やがて笑まひ美しう、さらば客人の君、我家おとなはせ給へと、つと立ち上りざま、秋波おくりて、卓に置きし小鏡ふところに、なよなよと蓮歩をうつす階のもと、供の男が肩に載せられ

髪かたち

大方の女の、一すぢ亂さぬ髪のたしなみは、さすがにふるき教への國とゆかし。濃きけはひに頰紅燃ゆる様にさして、玉の簪黄金の釵子、こちたきかざりも美人のは見よし。近き頃は前髪山形に切り下げて、いたう根さがりに結ぶが流行るといふ。着物のかたちも、この年頃にいたく移り變れり。袖廣きを田舎めくとて、細う仕立て、かひなのいやが上にも細かれと願ふ。袴も同じ様にせまきを好めど、見にくし。襟袖口にレースを付けて、したり顔なるよ。そうじて衣の色淺くなりたり。紫紺などは古めかしとて、若き人は用ゐず。良家の子女たち、水烟袋手にしてものへ行く、品劣りて、外

目にはうたひ女のたぐひかと見ゆれど、是がはやりと聞きぬ。少女のまみ口つき、近増りして美しきに、姿こそ今少しあらまほしけれ。かくいへど、この人達より見なば、亂れ勝ちなるひさし髪、幅廣き帶の結び、はたいかに思はれむ。口さがなしや。

小車（シヤオチヨウ）

驟雨さとそゝぐ廣野原、たちょる木蔭もなき一すぢ道

を、小車に乘りたる人の、ぬれじと傘かたむけて行くさま、いとをかし。工場に夕暮の汽笛鳴りて、道に續く工女の群、小さき足の運び遲きを、かごとに、强ひて、のせもの せたり、兩方の腰掛に四人づつ、淺黄の衣、遠見よく、さすがにかゝるきはにも生花の香りあるを簪し、車輪のきしりに女の八人、唐さへづり賑はしう過ぎ行く。花見て歸る醉のまぎれに、この車に乘りて、花一枝を帽子にはさみたる邦人、春は龍華寺の邊りに見るぞかし。この車よ、こよなき便りと昔よりもてはやされて、今も電車にけおされず、分け入る野路、軒をまじへし小路、凡

て人の足跡ある程の處には、大きなる荷も安らかに、人をも數多運ぶ。押す車夫の破れたる衣、垢に染みたるを今すこし清うして、花かげにやすらひつゝ、召せや召せ御一つれ、などいひたらむには、をかしからまし、さる人の申しき。

船出

いつもなれど、をかしきは舟出のさまなり。かしまし

き苦力（クリイ）、思ひ〳〵の荷を肩にして、昇り降る梯一つを、我れ勝ちに、乗る人見送る人連なり渡る。甲板は人もて埋もれたり。久しき別と名殘惜しみかたらふ人、安かれと舟路を祈りいふ人、待つ人やいかにと、ざれ言いひてひしめく誰彼れ。數多の人の一人一人あわたゞしき思を、あわたゞしう云ひ交す。出帆のかね打ち鳴らす程、こぼるゝやうに梯を下りて、棧橋にぞ幷み立てる。忘れたること思ひ出でて、上と下に云ひ交はすは、態とらしけれど、後れて來し人の近うよりて禮するに、聲はきこえず、たゞ笑みかはしたるは、中々に思ひ深う忘れ

がたきものなり。水の底すくひ上ぐるやうなる汽笛と共に、今しゆるぎ出づれば、舟よりも橋よりも、帽子手巾打ちふりて、又一時はさゞめきぬ。やうやう遠ざかりゆきて、人聲全くきこえず、排水の音のみ高うひゞく。遙にかへり見すれば、木立涼しき公園、音樂堂のあたり、白き裝ひの人五人六人、汀のベンチのほとりに遊べる子達がつば廣の帽子、アマが着たる淺黄の服、綠の中にさやかなるいとうつくし。園の後ろより、正金銀行の屋根ばかりぞ少し見ゆる。今工事中の公園橋落成の日は、往來の馬車このあたり迄、ひゞき聞ゆべし。はな

れこし波止場に未だ立ちつくす人、小さく小さくなりて、郵船會社の倉庫のみ猶間近う、實にやこゝに出で入りの誰も〳〵心地よく思はるゝは、この建物ぞかし。金文字のNYK、いでゆく時は遠くまで、入り來る時は、まづかゞやきて送り迎ふ。今も朝日にまたゝくやうにて。

上海にむかへる浦東、入り船のえるしの旗かゝぐるやぐらたてるあたり、何とかいへる工場あり。田舍屋ところ〴〵、楊も蘆もたゞ青う一目に、馬羊さては水牛の群こゝかしこに遊べる、畫にもかゝまほしきや。大船

小船いりつどへる間をぬひて出づれば、吳淞。濁浪空につゞくかとばかり。

驢

絶えずものに追はれたるやうなるさびしき足音、夕暮の色に消えて、あやしき嘶きの聲もあはれなる驢のむれ、町はづれに見たるあはれ深し。やゝ細長き米の袋、一つ一つ背に載せて、馬子に引かれ行く、先なるを追ふ八匹九匹、一すぢの綱も無けれど、道も違へず、先なるがやすらへば、續く八匹九匹の驢もやすらふ。狹き城内の石敷ける道、行きあふ轎子の先を拂ふにあへば、つゝましくかたよりて歩みつゞく。

南京は明の孝陵に詣でつる時、雨しめやかなるに、石人石馬濡れて立つ野の靜寂、かの淋しき足音にとぼ〳〵とたどり行けば、云ひ知らずあはれに、おもひ胸に滿ちて、荒れし都の跡とばかり、幾百年後の世なる外國よりの旅人も、そゞろに涙ぐまし。乘り捨てゝ詣づる程雨ふりまされば、傘さしかけての歸さ、實に驢ならでは風

雅ならじ。

薪すこしつみて、煙管を杖に翁引き行く、橋など渡りたるを遠くより見れば、さながら畫の心地ぞする。

相知れる沈氏といへる人、いつも年賀の折、愛兒ともなひて來ましゝが、幼き人には、紅に浮紋ある繻子の上着つけさせて、まろく美しき驢に、鞍置き、鈴つけて乘せたり。鞭をあげて、父の沈氏が轎子のあとに從ふうしろで、辮髪も未だ肩過ぎたるばかりなる愛らしさ。かくて年毎にたがはず來ませば、年の始の客人の第一に數へつゝ、誰も誰も彼の斷きに走り出て、鈴の音をこそ待

ち迎へしか。かの兒も大人になりましゝなるべし、今は驢に乘るや乘らずやや。

紙錢

磬の音あはれに、慟哭の聲野末を遠く遠くなり行く。喪服着たる人も少く、供の一人が持たる紙錢のみ夕日にきらめく。靈なきむくろをいづこに捨てゝ歸るやらむ、誰も同じ樣に土に歸るつひの世の門出さなぐ

なる中にも、この國の貧しき人のやうなるあはれはあらじ。目なれては何ともなけれど、すこし街より外にそゞろ歩きして見ませ。いづこにも柩のすてられたる、沼の樣なる所の塵塚にさへ、古きは雨に朽ちて蓋すてしあきたるなど、夜は鬼火燃ゆらむ。瓦屋根して小さき家つくり、窓一つ開けて入れたるは、さまでならぬ人のなるべし。同じ形なる小さきを添へたるは、子など持ちたる女のあとならむか。兆豐路といふ處に住みし時、表は大路砥の如く、馬くるま往來絶えず賑はしかりしかど、裏は廣き野原なりけり。雨しめやかなる

夕べなりき、常は閉ざしたる小さき窓ふと開きたるに、人丈ばかりなる程を、ふは〳〵と燃えて又消ゆる火の青さ、人の行くともなきにと、よく見てあれば、又ふはふはと燃えて、今度はすこし上になりぬ。鬼火よと思へば、頭より水かけられたる樣にて、身の毛いよ立ち、われ知らず窓の戸はたと閉ざしぬ。誰にもいはでありしに、又の夜、ボーイ顏色かへて、彼の窓の外指ざし、鬼火鬼火といふ。たがはざりけりといとゞ恐ろしくなりて、夕暮よりその方の窓は開かぬことゝ定めつ。晴れたるあした、例の柩のあるにこそと思ひて、廻り道して

行きて見れば、垣根に近う、かの窓の下にありけり。動かしたる樣にて、蓋すこしあきたり。白骨のまざ〳〵と見ゆるに、あなやと走りかへりぬ。其夜の恐ろしかりしこと、またの朝、人聲近う聞ゆれば、例の窓すこしあけて見るに、人あまた居て、彼の朽ちたるを新らしき柩とかへて、やがてかき行きぬ。紙錢やきたるは、亡き人の爲なるべし、ほそ〳〵と未だ烟の立ちのぼりたる、いひしらず寂しうあはれなり。其後は、雨の夜もことなかりき。やがて草切りはらはれて大きなる家ぞ建ちつゞきたる。今は人多く住みて、更くるまで燈火の光

賑はゝしとこそ聞きしか。

旅よそほひ

身を雲水の僧の一杖一笠、旅よそほひの手輕なるは、世を捨て人の上なればぞかし。この國の大官など、旅する折々の荷物のさても事々しや。乘り物寢臺はものの數かは、彼の李中堂は、歐州に旅せし時、棺をさへ持ちまはりたりとぞ。さるきはにはあらで、是はいと身の

程かろきあたり、日の本ならば革の手さげに柳行李といふいでたちをいかにといふに、くる〳〵と巻きたる棕梠の吳薦の中には、紺地に白くぬきたる唐草模様、うすくなえたるは、雨の日に仕舞忘れし煎餅のやうなる蒲團一枚、赤き切れにて製りたる枕一つ、心には菊花としても入りては居るまじ。是にて幾千里遠き旅寢を、かしはといふものになりて、夢はいづこに通ふらむ。外に籃子（ランツー）一つ、その中には、箸茶碗はいふもさらなり、鏡も履も、手洗鉢も、手巾、脚巾、しほらしきは書二三冊、筆墨のたぐひ迄入れたり。着換の下着は底の方にをさめ、雨

傘、雨履まで一切まとめて、此一かごにきッと引きゑめたる、網の目をもりて、丸きは丸なりに、長きは長なりに、遙々の旅路を主人の御供つとめ顔なり。むかし〳〵禹といふすぐれ人の、水ををさむとて、三年家門を過ぎて入らざりきとぞ。そはこのやうの御荷物にてはあらざりしならむも、なりはひの爲には、今も、三年はおろか十年二十年家門をくゞらぬ人珍らしからず。されば こそ商ひに勝れたる人の多きなめれ。一つは旅をものともせぬ性質にもよるべし。さても面白の旅よそほひや。

水棹

追風待つ舟の泊りのつれ〴〵に、同じやうにかゝれる隣の民船さしのぞく。ともの方所せきあたりに、かりそめの調度ものわびしう見ゆれど、未だうら若き女の、日當りに出でて髪結ふあり。鷄の聲、岸近き畑より聞えて、汀の芦も未だ冬枯のさま見えず、鷺鳥のさし伸ばすうなじに、秋風靜に吹いて、いひ知らずのどかなり。折しも何としけむ、瀧笛のしるべも無く進み來る小蒸氣船、足も沈むばかり豆粕つみたるを數多引きて通れば、たゞならず波にゆられてかたよる隣の舟、あなやと思ふ間に、彼の舟に打ち當る。女はと見れば、くしけづり居たる綠の髪とり上ぐる間もなし、つと立ち上りざま、水棹とりあげ、小さき足にもこもる懸命の力、しかと踏みしめて、向うの舟をさゝへぬ。舟底に眠れる男の、人聲に走り出し時は、既に安し。女はほと息して、紅さしたる頰のあたり、嬉しさをつゝみて殘る煤烟を見送り居たり。活々したる其面、時の間の働を語りて、云ひ知らずめでたうこそおぼえしか。

絶句

日清の役の頃なり。高見微笑といへるひとありけり。支那の僧侶に様をかへて、内地に深く入りましゝが、同志の士と共にとらはれて、寧波なる普陀山より、杭州府に護送せられ、清波門外にて銃殺の刑に處せられたる時、白き下着の背に、最後の詩ぞしるされたる。

男兒不復説行藏
此歳此時吾事止
附與斷頭機上霜
蓋天蓋地無端恨

敵ながら、日の本の志士が最後のあはれにめでたきを、

時の知府いたく感じて、懇に葬りつ、武士が形見の衣ぞとて、おろそかならずや保ちけむ、國のよしみ舊にかへりし後、公の司を經て、ことのよしを細かに傳へ、日の本に送りおこせけり。其折のことゝか知府は、箱にをさめたる衣、明日は渡さむとて、夜もすがら香をたきて別を惜みつ。あけがた少しまどろみたる夢に、まさ〳〵と亡き人現はれて、懇に別を告げけりとなむ。やさしき武士の道は、いづこもかはらざりけりと、聞く人涙こぼさぬはなかりき。

莫愁

磨かねど玉の光はおほはれで、湖添の畑に桑摘む少女、いやしき手わざもいたはしう、名も無き人の子なれども、天の成せる麗質玉の如く、花盛匂ひこぼるゝ十五の春、村の若人が切なる戀もあだにして、並びなき長者が一人子におもはれつゝ、昨日にかはれる今日の身の幸、頭上金釵十二行、足下絲履五文章、珊瑚のかゞみ桂蘭の室、日夜をあかぬ逸樂に、湖の緋鯉も嬉しとをどりて、憂ひと云ふもの知らで過ごしぬ。盧生の夢も人の世も、

水鳥の浮寢の床のさめやすさ。鴛鴦の契りこまやかなりし二人が中に、なさけなきは戰といふものなりけり。某も時の王に召されて出づる勇ましの首途、さるにても花の妻木にいかばかり、心引かれてかへりみしけむ。

春の夜の暗あやなくなりて、涙に明し暮せば、君と別れし思出ぞ盡きせぬ歎なる。夏にもなれば、明け安き夜をかこちし舟遊、漕ぎいでて今は一人をうつす湖の深きうらみは、秋ともなりて、み空を渡る雁がねも遠征の夫が便りはもたらさず。かくて冬さり春くれど、そよ

との風の音づれもなし。もしやと思ふ望みの糸、絶えてはいよ〳〵涙に幾年月、ものゝふは草むすかばねとなりはてゝ、夢やは通ふ紅閨のうち。薄命なる美人の操をあはれびて、後の人其名を取りて、莫愁の湖と名づけ、住居せし高楼なほ存して、鬱金堂とぞいひ傳へたる。

湘君竹

天の下知ろし召しゝ御力もすべなしや、民のさま見ま
さむの狩の途中、はかなくも蒼梧の野にて崩御ましま
しぬ御病あつしと都に早馬の使ありし日、とみに旅だ
たしてはる〳〵途を急がしゝが、甲斐なくておくれさ
せしきさいの宮の御歎き、申すも畏こし。太妃を娥皇、
小妃を女英ときこえて、先の帝堯の姫宮なり。御かた
ちありさまより初めて、御心ばへ美しく、深宮の中をさ
まりて、御代の春とこしへにおはしますべかりしを、か
くてはらからの宮は、洞庭湖中の君山といふに御庵む
すびてあけくれ帝をぞのびつゝ、御喪にこもらしゝ春
秋のいかにあはれなりけむ。御涙は凝りて湘竹に斑
をなしつ、うきふしを後の世までぞかたり傳へたる。

天心閣

岳麓の紅葉大かた落ち盡しつる頃なりき、友の案内にて天心閣に、例の轎子に乘りて、薄暗き道をたどり、やがて城壁にのぼる。湘江の水白うして、水陸洲も、長沙の街も暮れはてたり。風の音あはれに見る影も無き兵營の窓を音づれて、手づくねのかまどに煤びたるつる鍋掛けて、うづくまり居る兵士のやせたる顏、もゆる火にはと見えて、また烟にぞ隱るゝ。芦の葉さや〳〵と音して、足音にたゆるこほろぎの聲も、物さびしき路なり。關門まうけたる處に至れば、轎夫聲高に、いづこの館誰々と云ひて開けさす。城壁の中心とも云ひつべき處に高樓あり。白きひさしの內わたり、畫かきたる壁、宮の屋根めきたる瓦の形もをかしきに、彫刻したる欄干、月見むにはこよなき處なり。廣き室に燈火只一つ二つある桌の一つを取り圍みて、ものがたりす。風少し立ちぬ、今しのぼる月に雲やかゝると、友の云ふに、立ちて窓を推せば、あなや燈火消えぬ。ありつるよりも明う雲間よりもれ出でし光、人々めでたがる。遠くは岳麓の峯、水陸洲、さては黃金の波こぎわけて行く小

舟、近くは街の家並、ところどころの森、某廟某寺、それらをうねうねとめぐれる城壁、目を落せば樓門のほとり、乘り捨てたる轎子のさまもいひしらずをかし。月空とともに高う、更けてはいよゝ興もまさりて。

蜜柑畑

水陸洲とは、岳麓山と、長沙の街と相向ひたる中を流る る湘江のたゞなか、密柑多き中洲なり。朝霧の間より ほの〴〵と見ゆるは、いふも更なり。夏は夕暗に螢の飛び交ひたる、向ひの愛晩亭に夕日殘りて、江は暮れ渡れる夕もやに、月まつほどの詠めとり〴〵なる中にも、興あるは冬の頃の密柑畑なり。木の葉落ち盡して、梢の鳥の巣もあらはに、木がくれなりし賤の伏家もそこと知らるゝに、黄金色したる實の、枝もたわゝになりたる岸のほとり、小舟の中には小春日こゝちよう背にうけて、翁ねむりをり。畑には十ばかりなる童の、手に手に棹持ちてうち落すもあり。拾ひて籠に滿たすもあり。このあたりの畑、大方は誰々の持ちぬしとありて、

客人ある折々小僮して、舟出さしめつゝ、かくはすなりと聞く。霜白うなるまゝに、黄金色は紅になりていよよ美しう、花などの咲きたるやうなり。清き汀の小石ふみつゝ行けば、日の本にある心地ぞする。いかでこの洲一つ領じて、いやが上にも密柑畑つくり、年々にかぐの木の實を枝ながらして、かしこきあたりに上らば、離れ洲のさびしき住居も尊とからましなど。

開福寺

長沙の街はづれ、湘江のほとりに、開福寺といへる禪寺あり。相知れる日の本の法師のそこに錫をとゞめて、祖國よりはるゞ花の種などとりよせつゝ植ゑいますと聞きしかば見にゆく。秋雨しめやかなる日なり。街を出でしより眞菰みだるゝ沼づたひ、ゆき〳〵て一むら竹の生ひしげれる處に山門あり。正面には、そびゆる堂、落葉うづ高き雨がはには、禪房と云るされたるがあり。法師いで迎へらる。霜にうつろひ殘れる菊

をはじめ、廣き境内案内せられて見あるく。雨降りまされば、設けの舟遊びにせん、いざたまへとて、今度は庫裡の方に、人もわれも傘うちかたぶけて走り去たがふ。裏門に近きところ、孟宗竹雨に濕だりて、破れたるばせを葉のさは〳〵と音するあたり、見れば舟の形したるはなれ屋あり。招ぜらるゝまゝに皆のりうつる。池にむかひたる小さき窓開きて見ませ、碧浪湖の眺めをとほゝゑまる。實にや桌も椅子も舟中のそれにて、いとをかし。まして碧浪湖にたぐへし池のさゞ浪、よるよるの月には清興いかばかりならむと、誰も〳〵心すみて、折から來ましゝ笠雲禪師とともに、小笹にそゝぐ雨の音を聞き暮らして、火ともし頃までぞ語らひたる。

詩牋

父上赤い紙を頂戴、黄ろいのもと、小椽傳ひに書齋に行けば、書讀みふけり給ひし時も、將た文作り給ひし時にも、必ず、切りくだくのでは無い、字を書いて見よと、書棚より詩牋とりおろし、二三枚賜はりき。姉上は未だ學

校より歸りまさず、晝靜なる家の内、母上が居間に縫ひ物します傍に、遊びあきてはいつも。

父上其頃より深く思し決する處ありて、城下を離るゝ十里、藩祖芳烈公の築き置かれし閑谷黌を再興さむとて、山に入りましぬ。やがて家を擧て移し給ひしは、我いとけなき時なり。滊車の未だ通はぬ程なれば、車にて國道を、われは父上のお膝に載せられて行きぬ。和氣川の渡しに初めて舟といふものに乘りて、魚が居りますと舟べりに清き流をさしのぞきて、それあぶないと父上に抱かれし。四方の山青葉に暗く、雨かと思ふ谷川の水の音も寂しき夕暮、石門に着きて數多の人に迎へられ、もの心細き夜を住み馴れぬ家に入りて、父上は一人心地よげに、集ひ來ましゝ教師の君たちと談りふかし給ひき。

父上の初めて支那に渡りましゝ時のことゝか、未だ公のゆるしなきを、二三の士と相謀りて、ひそかに舟出しつ。父上御歳二十ばかりなりき、もとゞり結ひ、大小腰にしたるまゝ、楊子江の濁浪に驚かざりし身も、船暈には苦しみつ、吳淞より徐々と上海に夕暮のけしき盛なる、千舟百舟の燈火陸にもつゞく繁華のさま見し時の

おもひよとて、から〳〵と笑ひ給ふが常なりき。再は天津に。其折は母上も子等も、やがてかの地へ呼び迎へ給ふ御心組なりしに、ゆくりなく病を得ましつと聞きぬ。その後ゑばしがほど國事にたづさはり給ひしかど、志ならねばとて、人の惜しむ榮達を自ら捨てゝ山中に、そは我が初志を傳へむ人をつくる爲ぞと、折にふれては洩し給ひき。えにしありてわれこゝにゆきゝの身となりし時よ、父上の御喜び、あゝ父上の御喜び、それも昔の夢となりぬ。あはれ赤い詩牋に今も字は得書かず、見る度に思ひ出の涙こそ盡きせぬ。

花

貴きも賤しきも、なべて花めづる心のやさしさ。秋になりて桂花かをる頃よ、女はかざしに行きあふうつり香ゆかしう、轎子には小さき掛花いけに、乘り居る人の袂ぞかをる。つゞれまとへる苦力（クーリー）が推し行く小車にさへ、一枝をはさみたる、嬉し。

花は龍華（ロンホウ）の桃、長沙の躑躅、杭州は孤山の梅ぞ殊にすぐれたる。過ぎし年師の君のこゝに來ましゝ時、いたく賞で給ひて、詩の友に分たむとて、一枝小がめにさして、

はるゞ日の本にもたしゝことあり。古も今もかはらぬ風雅を、林處士の芳魂も、地下にほゝゑみてやありけむ。

四川は古の蜀、娥眉山には櫻ありと聞けど、未だえ行き見ず。いかで一度はと思へど、よきついでもなし。今年とつぎて蜀に入りし友よ、花の便りをおくり給ふやいかに。

（終）

思の水たゝひてひろくゆたやかに洞庭の湖のひろくゆたやかに
支那の海あらき波間をかきわけて拾ひとりけむこの眞白たま
遠々しみんなみ支那の山ら川らまつろひ伏しぬ彩筆の前に

石樽千亦

なつかしき御心からにつましけむやさし
く清くあえかなる花

うつくしきたま手に成りし書見れば女て
ふ名もはえありと思ふ

片山廣子

白岩艶子ぬし、年頃清國におはして、景色ことなり風俗變れるその國に、見たまひ聽きたまひける事どもの多かるを、たゞ自らの興にのみはとゞめおきたまはず、折々にかき記したまへるが、いみじき御筆の走りはをかしき彩をなして、こゝに清らかなる一卷の書とはなりぬ。舞姫をのせたる轎子のゆきかふ四馬路の夜景、珍らしげなる彼の

國固有の演劇、さては楊柳の蔭をゆるく行く水、夕靄の中にいなゝく驢馬の聲、風俗につけ風景につけ、古く大きやかなる國柄のたふとさは、今も猶昔おぼえていかにゆかしう殘るらむ、かの倫敦伯林わたりにも見らるべきかはと、御書を讀みをはりて思ひつづけつゝもかくなむ。

大塚楠緒子

明治四十三年四月七日印刷
明治四十三年四月十日發行

非賣品

編纂者　白岩艷子

印刷者　東京市京橋區築地南小田原町二丁目九番地　中野鉄太郎

印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　東洋印刷株式會社